

# Ai研 NewsLetter No.2

相澤病院臨床研修センターニュース

2010年10月15日

40万部を超えたベストセラーの「神様のカルテ」は、“本庄病院”という架空の病院の若い医師が主人公という設定であり、相澤病院での状況をモデルにしていることは明らかな様だ。著者の夏川草介氏は、信州大学を卒業後、相澤病院で臨床研修と後期内科研修を行った方で、現在は、信州大学病院に大学院生として在籍している。相澤病院研修医同窓会の初代会長でもあった。彼は、夏目漱石の作品をこよなく愛し、学生時代から暗唱できるほど繰り返し読んでいたという。彼の作品を読んでみると確かに、漱石ばりに歯切れのいい軽妙な文章で書かれていて読み易い。言葉遣いが明治調で古めかしいところもあるが、つい引き込まれて読んでしまう。超忙しい病院での出来事と人間模様が中心であるが、情景・感情の微妙な描写が優れており、つい涙が出そうな場面も幾つかある。

最近、続編の「神様のカルテ2」が出版された。たまたま、街の本屋の店頭に積まれていたので、「前作と同じ様な内容じゃつまらないな」と思いつつも「彼に印税を払ってもいいか」という気持ちになり、前作よりやや値上がりしていたが購入した。読み始めてみると案に相違して引き込まれ、2日で読んでしまった。

内容の紹介は、これから読む人のために割愛するが、「プロローグ」と「エピローグ」についてのみ話そう。「プロローグ」を読んでいて、自分自身が医学生頃の頃、スキー場のゲレンデ頂上の新雪の上に立ったときの気持ちを思い起こされた。特に、八方尾根の兎平と国民宿舎との中ほどにあった薬大ヒュッテ(東京薬科大学ヒュッテ)に泊り、朝一番に新雪の積もったヒュッテの前に出て、朝日の中でパノラミックに展開する山なみを見て感激したこと、雪の感触と踏む音を忘れられない。言葉には表しきれなかった感激であった。

この「プロローグ」には、主人公のイチさんが細君に連れられて、冬的美ヶ原の雪上をスノーシューで歩くシーンが心憎いほど巧みに臨場感あふれて描写されている。部分的に抜粋してみる。

(雪原を暫く歩き)

「振り返ってみると、新品の半紙を敷き詰めたかのような真っ白な新雪の中に、私と細君が歩いてきた足跡だけが点々と続いている。」

(王ヶ頭に到着して)

「三方には視界をさえぎるものはなく、はるかかなた前方、雲海の向こうに、巨大な山脈が連なっているのが見えた。稜線上に豊かな白雪を積もらせた悠々たる山並みが、まるで地平線のように世界を上下に分かっていた。」(北アルプス)

「ふいに私は乗鞍岳の左手の雲間に、場違いなほどの迫力で忽焉と屹立する巨山を見つけて息を飲んだ。」

「連なる木曽の稜線から頭ひとつ飛び出した異様なその白い塊りは、木曽山脈を傲然と見下ろす並はずれた存在感で雲間に座していた。まるで中央アルプスを従えた山の王だ。王の嶽、御嶽とはまさしく言い得て妙である。」

先週の日曜日、紅葉を見に美ヶ原高原へドライブに家内を誘って出掛けた。百曲がりを上ってゆぐうちに美しい紅葉で赤・黄・緑の広がる山腹にみとれたが、このような多色の紅葉は、氷河期を比較的温暖に乗り切った日本列島のみに見られるものだと前夜のテレビで説明していた。「そういえば留学中に見た北米の紅葉は黄色一色だったね」といいながら、藤原正彦氏の言葉を思い出した。彼は、相澤病院100周年記念の講演の際に「外国人は紅葉を見て、ただDead leaves (枯葉) だと言うのだ」と皮肉っていた。

美ヶ原頂上を王ヶ頭に向かって歩いて行くと、秋の御嶽山がはるか彼方、雲の間に見えた。これが、真冬厳寒の王ヶ頭でイチさんと細君が感激した御嶽山の秋の姿か、とフィルムにおさめた。イチさんは、御嶽の余りの見事さに、来年は御嶽登山に挑戦すると細君に約束してしまう。そして、その登山記が「神様のカルテ2」の「エピローグ」として書かれている。

ところで我等夫婦は、美しの塔の広場にあるベンチで一休みした時、足元に咲いた一輪の花に目をとめた。「三茎に独り咲くあざみかな」とは我が細君の句。

臨床研修センター長 小林 茂昭